北大時代からこれまでの思い出つれづれ

露 崎 史 朗

「同情するなら職をくれ！」と安達祐実風に私は叫んでいた。現在私は新潟大学大学院自然科学研究科の一応の助手ではある。しかし，この助手は変則的で新潟大学大学院自然科学研究科規定集の新潟大学大学院自然科学研究科助手選考内規「大学院自然科学研究科に所属する助手の選考についての申合せ事項」に「概ね３－５年を目途として各学問分野のローテイションとする」と書かれており，公にできない期限付きの助手らしい。この怪しい期限を理由に先日，日本学術振興会の日米科学協力事業協同研究を申請したら「来年も当研究科に所属することを前提とした科研申請は認められない」のだそうで，私の知らない間に講座主任（ここに実名をいれても誰も知らないでしょうから止めておこう）の判断とかで申請が取り下げられていた。ということは，新潟に来てからはや５年が経過しているわけだ。私個人としては，別に来年もここに居るつもりではなく，大学を移れば移動届を出せばそれで済むことだし科研の採否の判断は学振がすることであると思うのだが。「こんなの研究妨害だ！いつか文部省に訴えてやる。しかし，まずはこういう腐った所は出るべきだ。」と思っていた矢先に同窓会の原稿依頼がやってきた。

私は1980年北大理III類に入学し，何故か留年もせず1982年に理学部生物学科植物専攻課程に移行し，さらに何故か留年もせず1984年に卒業できた。その後，理学部を離れ北大大学院環境科学研究科で修士課程を過ごし一年間の研究生生活を経て再び北大大学院理学研究科（とはいっても低温科学研究所）にいた。その後，日本学術振興会特別研究員を若干の期間経て現職にある。「皆さん職を下さい（文章中にサブリミナル効果はあるのだろうか）。」従って，回想を書こうと思うとどれが理学部にいた時の記憶なのかが極めてあやふやなものが多いので，これは確かだということを書いておきたいと思う。

植物学教室は当時，分類，形態，生理そして教養と３ないし４講座体制でなりたっていた。しかし，分類の黒木先生が亡くなられ，形態の谷藤先生，生理の佐々木（昭）先生は退官なされ，さらに改組で植物と動物を分けなくなった今と私がいた当時とでは教室の雰囲気も大分違うことと思う。そこで，話の種としてこれまでのことを幾つかここに書き留めておこう。

「何故卒業出来たのだろう。」谷藤先生が関与していたことは間違いない（当人は知る由もないが）。当時，植物学教室の学生は15人であった。結構個性的な人物が揃っていて，皆目的意識がはっきりしていたように思う。私は分類の授業は結構出たつもりでいるが（しかしこれも平均値を下回るかもしれない），形態や生理の講義実験となると，その内容はほとんど記憶にないくらいひどいものだった（実際出ていないのだから覚えているわけもない）。逆の行動パターンの人もかなりいて，分類のスケッチは人の写し専門の人もいた。しかもそれがオリジナルより美しい。谷藤先生は当時細胞生物学ＩとIIの講義とそれに関係する講義実験を持っていたように思う。私は細胞生物学IIの講義は一度も出席せず試験すら受けていない（こんな学生もういない？）。しかし，単位はついていた。これで卒業必要単位が足りたようなものだ。あげくに，植物生理学IIの講義は履修願いすら届けておらず，植物学教室の学生全員が履修しているものだと思った佐々木（昭）先生があとで，「一人履修届けがでていない」とあわてたそうだ。（私は農学部で植物分類学の講義を同じ時間に受けていました。佐々木先生ごめんなさい。）

卒論は分類の黒木先生のところで過ごした。当時の分類学教室の卒論生は４名であった。他の３名はナンタラカンタラの海藻の分類学的研究あるいはドコソコの海藻フローラについてがテーマであったが，私の卒論は有珠山の植生回復がテーマとなった。その年，黒木先生にとって私たちは最後の卒論生にあたり，学生個々人に好きなテーマを選ばせてくれた。私は高等植物を材料としたかったので，こういうこととなった。自分で選んだテーマだけに，結構

全員真剣に卒論に取り組んでいたように思う。更に，黒木先生の脅しともとれる発言も忘れない。「僕（黒木先生）は何もしないから，就職・進学等の活動は皆自分でするように。」本当に何もしなかった（これがかえってものすごい効果があった。）だがしかし，卒論を出さずに卒業した大物もいる。私は現在でも有珠山の調査は継続しており，黒木先生によって植物生態学研究者のはしくれとさせて頂いたような気もする。そのおかげで，合衆国セントヘレンズ山の調査や，中国の湿原やシベリアのツンドラ・タイガを見ることができた。特にセントヘレンズ山では火山植生の比較研究の様々なアイデアを得ることができ，また滞在生活も家族と共にエンジョイできた。帰国後には，日本植物学会奨励賞も頂いてしまった。

卒論の後，環境科学に移り更に低温研に移ったわけだが，理学部と全く縁がなくなってしまったわけでもない。特に印象に残っていることとしては，低温研に移る時には増田先生がからんでいたことである。当時，環境科学の指導教官から「お宅のような学生はドクターにとらない」と言われ（何が悪かったのだろう），博士課程には進学せず（できず？）研究生でいた私は自分の身の置き場に困っていた。その時，フセインの影武者からある指令を受け，雪の中を増田先生に「低温研の博士課程に行きたいんですけど」とお願いに行った記憶がある。清水次郎長ばりの増田先生は，「○○には内緒だぞ！」と言いながら指導教官となる吉田（静）先生に会わせて下さった。ここでも私の人生は大きく変わってしまった。また，当時植物学教室では学部3年生を対象として幌見実習なる陸上植物の採集実習があり，それに博士時代まで毎年お供をさせて頂いた。私が学生だった時には，スカート，シューズ姿で実習に参加し大騒ぎしていた女の子がいたことも忘れない。実習は，水だらけの沢でやります。私は長靴で行きました。

植物学専攻課程には吉田先生が2人いる。一人は分類学教室の吉田（忠）先生，もう一人は前述の吉田（静）先生である。分類の吉田先生は，私が真面目に出た数少ない講義の一つである植物分類学II（主として陸上植物）を受け持たれ，その物静かな授業は教室随一であったろう。笑えない冗談をいうのがたまに傷であったが。低温研の吉田先生は，本年（1995）還暦を迎え2月にささやかながらもお祝いをさせて頂いた。昔通りの元気さとヘビースモーキングと御変りのないご様子であった。［質問］北大の多くの先生はどうして皆，若々しいのだろう。低温研の吉田先生には，徹夜開けの教室でシュラフで寝ていたところを発見されたり，コンピュータに一寸した遊びをさせていたところを見つかったりしたが，当時の院生は皆あのようだったような気もする。

札幌を離れ5年が過ぎた今思うに北大の自由な雰囲気と，そして「Be ambitious！」の精神は貴重である。自分が教官となって自覚させられることは，研究成果を上げていない人間が大学院の学生を指導できるわけがないということの一語につきる。いらぬ親切余計なお世話（＝これ即ち研究妨害）ばかりする人間にはなりたくない。仕事をしていないとどうしても，示唆を与えたつもりがただの邪魔になってしまうようだ。そういう意味では，活発な活躍を続けている，植物学教室，低温研，地環研の皆様の研究活動は私にとって大きな刺激である。今後とも，少なくとも大学院においては研究を基盤とした教育が必要となることは言うまでもないことなのだが，私の周辺では現実とのギャップは大きい。（今の気分は安達祐実。）

（生物学科（植物専攻）昭和59年卒（54期））